

3 . 現地調査結果の概要

1日目(9月25日)

JR名古屋駅に集合し、バスに乗り込み東名阪自動車道、伊勢自動車道、R42 を経由して紀勢町錦地区に向かった。

〔紀勢町錦地区〕

紀勢町錦地区は錦湾の奥に位置する漁業の盛んな地区である。同地区は、昭和19年12月7日の東南海地震津波により、死者64名、流失全壊家屋447戸、半壊浸水家屋235戸、船舶被害101隻という大きな被害が生じ、三重県下においては最も死者数が多かった地区である。同地区の津波対策として、緊急避難塔・錦タワーが平成10年に築造されました。紀勢町役場総務課の小山課長補佐のご案内で錦タワーを見学した。錦タワーは鉄筋コンクリート5階建(高さ21.8m)で、2階から5階までが避難スペースとして利用できるようになっており、収容能力は500名である。避難スペースのフロアの高さは東南海地震津波の高さ(6.5m)を基準として、浸水しない高さ(2F・8.1m)に設定されている。また、錦地区においては錦タワー以外にも避難所が整備されており、その1つを見学した。避難所には緊急の際に使用する機材(発電機、懐中電灯、等)が備え付けられていた。



錦タワーの全景



錦タワーから見た市街地の状況



山の斜面にある避難所

〔尾鷲市役所〕

尾鷲市役所において、同市の津波対策についてヒアリングを行うとともに、意見交換会を行った。この会議には、尾鷲市の伊藤允久市長をはじめ多数の方にご出席いただいた。まず、同市の総務課の濱田調整監から「市民の防災意識の高揚及び啓発について」の活動内容についてご説明いただいた。基本的には避難を主体とするソフト対策に主眼が置かれており、地区ごとの防災懇談

会を開催したり、防災訓練のシナリオを地域で作成させたりすることにより、徐々に成果が現れつつあるとのことでした。その後、双方から活発に質疑応答や意見交換を行った。その中で漁船の避難や車での避難の是非が話題になった。



尾鷲市長のご挨拶



会議の会場風景

* 当日は、あいにくの空模様で、強い雨が降りしきる中をずぶ濡れになりながらも熱心に避難所の見学を行いました。

2日目(9月27日)

熊野市の宿舎を出発し、同市の新鹿から和歌山県的那智勝浦、串本を経て白浜に向かう強行軍で現地調査を行いました。

〔熊野市新鹿地区〕

熊野市の新鹿地区は、新鹿湾奥の河口に開けた集落である。同地区は地形特性のため津波波高が大きくなる地点であり、安政東海地震津波では8~10m、東南海地震津波では7.1mの痕跡が明らかにされている。新鹿津波調査会の資料によれば、東南海地震津波により新鹿地区では死亡者13名、流失家屋162戸、全半壊85戸の被害があったと報告されている。

新鹿公民館において新鹿地区の住民の方々と意見交換会を持つことができました。住民の方からは、東南海地震と津波の体験談や避難の心得、津波防災対策の提案などを聞くことができました。地元では、津波防波堤の設置、防潮水門の設置を望んでいるようでした。また、熊野市防災課から熊野市における津波防災の取り組みとして、地震・津波に対する日常の心得(防災マニュアル)による区民への呼びかけ、地震・津波対策についてご説明いただいた。同地区には、宝永、安政、東南海の各津波の痕跡を示す水位標があるため、これを見学した。



新鹿における交流会の状況



安政東海地震津波の「津波留」

〔那智勝浦町〕

那智勝浦町は那智湾、勝浦湾の奥に市街地が形成されており、観光地として有名な町である。同町では、東南海地震津波により死者 27 人、流失家屋 76 戸、床上浸水 621 戸の大きな被害が生じており、和歌山県で最大の被害であった。津波の高さは 6m 程度であったことが表らにより明らかにされている。雨の降る悪天候の中、那智勝浦町総務課の田原さんのご案内で浜の宮にある王子神社境内で津波の到達点を見学した。



また、当時那智で東南海津波を体験した田原康司さん（研究会会員）から津波の体験談や被害の状況をお聞きした。また、同じく田原さん（会員）から東南海津波の被災写真のコピーをご提供いただいた。お話の中では、勝浦駅の前に亡くなった方の遺体がしばらく並べられていたことが印象に残ったとともに、那智勝浦においてはハードとしての津波対策が全く行われておらず、津波に対する備えが不十分であることを力説されていました。

〔串本町〕

串本町では、串本町役場と住民代表の方のご案内で大水崎地区にある住民が自ら造った避難路を見学した。現在は町の予算により完成を目指した工事を実施中である。また、袋地区の避難路も見学した。袋地区は、昭和南海地震津波の時に串本町で最も津波の高さが高く（6m）、被害の大きかったところである。現地を見た感想としては、避難路に手摺や照明が未整備であったり、急勾配であることなどの改善すべき点



大水崎避難路

が見受けられた。

- * 新鹿では、NHK 津放送局の取材があり三重県下では既に放送が行われました。
- * 串本から宿泊予定の白浜に向かう間に、現地見学で昨日から悩まされた雨は上がりました。

3日目（9月28日）

白浜の宿舎を出発し、田辺市内の見学と広川町の見学をし、JR 和歌山駅で現地解散しました。

〔田辺市〕

田辺市総務課の新谷参事と浦辺企画員のご案内で、内之浦干潟公園内にある津波モニュメント、山祇神社の津波痕跡（安政および昭和南海）、東光寺にある宝永地震津波の水位標、津波碑、昭和南海地震津波の供養塔を見学した。内之浦干潟公園の東側には、昭和南海地震津波の後に集団で高地移転した住宅群が建ち並んでいた。

紀南農協新庄支所前の津波水位標（昭和南海）を見学した後、新庄公民館で柏木館長から昭和南海地震津波の被害と体験談についてご説明を受けた。旧新庄村の被害は死亡者 23 名、流失家屋 92 戸、全壊家屋 108 戸、床上浸水 280 戸に及んだ。新庄は木材の加工場が多かったため、多くの木材や船舶が打ち上げられた。多くの人は、紀勢線の線路を越えて高台に避難して助かったが、逃げ遅れたり、一度逃げた後に家に戻った方が犠牲になったと説明があった。新庄地区は昭和 35 年のチリ津波でも被災しており、その後に津波対策として文里港防波堤が築かれたと説明があった。残念ながら、この防波堤は時間の都合で見学できなかった。



内之浦干潟公園内の津波モニュメント



内之浦の高地移転住宅



新庄公民館の柏木館長

〔 広川町 〕

広川町は、戦前の小学国語読本にあった津波防災を題材とした「稲むらの火」のモデルになった町である。その主人公である五兵衛のモデルとなった浜口梧陵が安政津波の後に私財を投じて造らせた津波堤防を広川町中央公民館の清水館長のご案内で見学した。この津波堤防は、全長約 600m、高さ 5m、根幅 20 m、天端幅 2m で人夫延 56,736 人を要した。この堤防があったため昭和南海地震津波による被害が町の中心には及ばなかったと言われている。清水館長は、浜口梧陵の功績について自ら作成した布製の資料で、熱心にご説明下さった。清水館長の説明の後、現在、和歌山県が湯浅広港で計画中の湾口防波堤の概要について、和歌山県港湾課の宮井技師よりご説明があった。



浜口梧陵の銅像



広川町中央公民館の清水館長



広村堤防

4 . おわりに

今年度は、三重県の紀勢町から和歌山県の広川町までの間を対象に東南海・南海地震津波の痕跡と沿岸市町村の取り組みについて現地調査を行いました。今年度の調査では、施設見学だけでなく尾鷲市をはじめとする地元の方々との意見交換の場が持てて、非常に参考になりました。また、現地で行った意見交換会には行政機関や地域住民に多数お集まりいただき、津波防災に対する関心の高さが身をもって感じられました。2泊3日で紀伊半島をほぼ1周する強行日程に加えて、26日、27日は悪天候の中ではありますが、その分印象深い現地見学ができたと思います。

最後に、施設のご案内を頂いた南勢町総務課、熊野市総務課、那智勝浦町総務課、串本町総務課、田辺市総務課の皆様、新庄公民館の柏木館長、広川町中央公民館の清水館長、ならびに意見交換会にご参加いただいた尾鷲市長をはじめとする市関係者、新鹿地区の皆様にご心からお礼申し上げます。また、今回の現地調査に企画協力頂いた三重県の中嶋主査、和歌山県の梅本主任にも心からお礼申し上げます。

〔事務局 / 榊原 弘〕